

— 連載 —

美術館のある風景 (第18回)

開館から5年が過ぎて



薔薇の花で彩られる三菱一号館広場

三菱地所株式会社 美術館室 恵良 隆二

三菱一号館美術館（以下、「当館」）では、「ワシントン・ナショナル・ギャラリー～アメリカ合衆国が誇る印象派コレクション」展を開催中です。このコレクションは富豪アンドリュー・W・メロンの娘エイルサ・メロン（1901～69年）の自宅を飾った上質で日常を慈しむ小作品群です。当館の展示空間にぴったりの展覧会であり、当館の展覧会の切り口の一つである「19世紀後半～20世紀前半の社会と生活」に合致する内容です。また、「街と共に生きる美術館」をミッションに掲げて、間もなく（4月6日）開館6年目を迎えるこの時期にふさわしい企画展となっています。

これまでの本コラムでは、高橋館長が社会と美術館の関係と意義、展覧会やコレクション形成などの多面的な美術館活動を紹介してきました。私からは当館の成立が丸の内の歴史にその源を持つこと、丸の内のまちづくりでの役割、そしてパブリックアートの展開を横浜や丸の内を例に紹介しました。さらに、近代の都市形成のなかでカフェ空間が果たした都市文化の醸成に眼を向けながら当館の「カフェ1894」への期待にも触れてみました。丸ビル開業から12年が過ぎ、美術館開業から5年間を経て丸の内のイメージは大きく変わりました。最近のアンケートやヒアリングから、丸の内は「大人の街」「洗練された街」「国際的な街」のイメージを高め、「文化的な（芸術・アート）街」としても捉えられ始めていることが類推されるよ

うになりました。また、当館に訪れる人たちは、ショッピング、飲食、散歩など都心の街歩きも楽しんでいるようです。一方で、当館の立地条件の良さは、多くの国内外の専門家が街に訪れる機会を増やし、美術の世界での当館の信頼感あるネットワークづくりにも寄与しています。ビジネスセンターの財産は企業と人のネットワーク、美術の世界にも通じるところがあるようです。

美術館づくりを始めた頃に、美術館を街の機能と捉えがちだった私ですが、最近は、都市の構造的な構成要素と感じるようになりました。まちづくりに文化芸術の軸を持つことが大切で、その表象施設としての美術館であり、音楽ホールであり、劇場ではないかと考えています。街の機能的な便益の先に、街の情緒的な価値や魅力が生まれ、街のブランドに至る流れです。そこに美術館の意味が見えてくると感じています。また、文化の継続性を考えると、その文化的な質、社会的な認知、経済的に継続する仕組みの3つが大切に思えます。これからのビジネスの世界では知的生産性・創造性が問われるとの指摘もあります。当館はビジネス街での新たな魅力と役割が期待されることでしょう。2020年は東京オリンピックの年です。その時、丸の内と三菱一号館美術館はどんな姿で人々を迎えるのでしょうか。さくらの開花の訪れとともに、当館の次の5年間が始まります。